

# カトリック 高松教区報

2005年10月2日(第108号)

発行所 カトリック高松司教区

広報委員会

〒760-0074

高松市桜町1-8-9

TEL 087-831-6659

FAX 087-833-1484

Email tkcuria@mxi.netwave.or.jp



## 若者を育てる

高松教区長 溝部 脩

私は青年活動に携わっては四〇年になります。一年も休まず、この活動を続けたことを誇りに思っています。司祭になって最初に赴任したのは大分教会でした。当時二人の女子高校生が教会に来ていました。「二人しかない」と、ある司祭に話しました。彼は「一人もいるよ」と考えたらいと諭してくれました。私はこれで開眼しました。青年活動は二人から始めればよいのです。

大分教区の平山司教様から大分大学の学生のために働いてくれと頼まれました。どうしてよいか分からないまま、大学の正面入り口に立って聖書研究の案内のパンフレットを配りました。最初の研究会に何人来るかと思ったら、何と二八名来しました。内の九名が洗礼を受けました。今

年の八月松山で大分大学の卒業生が集まり、皆声を揃えて、学生時代に習った聖書や学生生活のことに感謝していました。青年活動には発想法の転換と挑戦していく勇氣が必要です。

長崎転勤の折、そこでも青年ボランティア・グループを立ち上げました。教会内では青年が来ない、教会離れが激しいと嘆いていました。また、中高生は部活があり、教会活動はできないと諦めていました。これだけ伝統のある教会なのできつと青年活動は活発だと思っていたので意外でした。私は数人の青年と話し合っ、海外青年ボランティア・グループを立ち上げました。教区がそのためにお金を出すと申し出てくれました。私は断りました。自らが身銭を切らない青年活動は育たないと思っ

たからです。後援会を立ち上げ、事務局をつくりました。青年が来ないとの嘆き節はもう四〇年聞いてきました。四〇年前嘆き節の代わりに青年を一人でも育てることをしていれば、今は事情が随分変わっていたはず。今でも遅くはありません。青年を集めるにはどうすれば良いのか知恵を出し合ってみることで

ケルンの世界青年大会で青年は燃えているはず。今こそ教区を活性化する良い機会が与えられています。面白い教区生活から脱皮する良いチャンスです。



ケルン世界青年大会にて高松教区の青年と

## はばたき

「なげないことですよ、なげないことですよ...」老神父は大きな涙をボロボロ流した。まだ若かった私はその大きな手を握って「神父さま大丈夫じゃけんね、大丈夫じゃけんね」といっし言葉がなかった。寝たきり状態になりシモの世話までしてもらわねばならなくなった老神父の悲しみははかりしれなかつた。豪放磊落な神父様だった。外国人でありながら地方方言まるだしで、それが説教では一種の迫力があり、よく理解できた。私たち若者がたむろしていると「おまえら何しよんぞ」とやってきて冗談をふりまいた。戦前から戦中、戦後の困難な時代にも四国各地の教会を守り、信徒を守り、みことばを宣べ伝えた。そんな功多き神父様も最後の試練を乗り越えて安息の地で憩われている。夏の鎮魂のシーズン、亡き神父様たちのことを思う。今は秋、溝部司教様着座後初の信徒大会を終え、高松教区は実りの秋を迎えようとしている。

# WYD 起承転結



八月九日から二五日にかけて高松教区の青年二三名が、日本巡礼団の一員として、溝部司教、ジュード神父、ホルヘ神父とともにワールドユースデーケルン大会に参加した。

八月二〇日の教皇様との夕の祈り、翌二一日の教皇ミサをクライマックスとする一六日間の巡礼の思い出を「出発」「ホームステイ」「本大会」「帰途」に分け、六人の青年に綴ってもらった。

## 起 出発からホームステイまで

日本出発当日の朝、飛行機の関係で前日から泊めて頂いた大阪の修道院の聖堂でWYDの祈願を行い、荷物をまとめて大阪国際空港に向かいました。さらに、国際線に乗り継ぐため伊丹空港から成田空港へと移動しました。国際線では日本からドイツまでの飛行時間が一二時間と非常に長い時間を要します。しかし、飛行機内には日本の各教区の青年達が沢山搭乗しており、同じような目的を持って集まったということもあり、お互いの壁はすぐになくなり、この旅をどんなものにしたいかなど語り合っていました。そうしているうちに、一二時間は過ぎ去り、目的地のフランクフルト空港に着きました。ドイツに着いてさっそく、驚いたことは日中の時間の長さでした。一九時、二〇時と時間が経過しても未だに暗くなりません。ようやく二一時ぐらいになると太陽が沈み、夕闇が近づいてくるのです。そんな感じで初日は移動日



フィアンデンの森へ

となり、疲れを癒すためユースホステルに泊まり、床につきました。

翌日、フィアンデン市に向かい、トリニテ教会にて団結式を行いました。

その後、それぞれがこのWYDに対する思いを考えつつ、森の聖母教会まで片道一時間の巡礼を行いました。さらに、フィアンデン城見学も行い、西洋の建造物や歴史などを堪能しました。

そして、その日の夕方にはルクセンブルクの各小教区のホームステイ先へと移動して行きました。

中島町教会 田本晋吾

高知を出発し大阪に向かう車の中では合流した仲間と話しながら、心のな

かでは、無事日程を乗り越えることができるだろうか、という心配と、これから始まる未知の体験への希望を感じながら巡礼に来た意味を考えていました。

伊丹空港を発つてからドイツに到着するまではあつという間でした。そして到着してからあまり実感はなく、翌日ルクセンブルクのフィアンデン城周辺を巡礼しながら少しづつ、「ああヨーロッパに来たんだ」と感じました。

私にとってホームステイは初めての体験でした。全く英語の分からない私は、とりえず向こうで無口な人だけには思われたくないと思い、バスの中で、アイ・キャント・スピーク・イングリッシュという言葉を一生涯覚悟しながらホストファミリー達の待つ会場に向かいました。様々な想いを抱きつつ。

中島町教会 田所幸稔

## 承 ホームステイでの体験

WYDに参加することは、私にとって初めての海外旅行であり初めての巡礼でした。そして、初めてのホームステイだったのですが妙なところで肝が座っていて意外に動じませんでした。ルクセンブルクに着いて大勢のホームステイ先の人たちが迎えに来てくれて

いるのを見るまでは、右を見ても左を見ても英語で会話をしている人達ばかりで(当たり前ですが)急に恐ろしくなりましたが既に後の祭りです。方角を間違っていました。実は全く英語は出来ません。学生時代に何故こんな点数取れるんだ、と言われ続けたいくらい出来ません。でも、いえ、だからこそジェスチャーと単語で頑張ろうと決めていたのにやはり無理ですね!と、そんなわけで困っていたのですが一緒にホームステイする相手の人が英語と日本語が話せる方でした。これは天の助けと言わんばかりでその方に通訳を頼みまして何とかステイ先では大した問題もなく過ごすことが出来ました。やはり少しでも会話が出来るように頑張った方が良かったですね。

ホームステイ二日目。小教区で朝ミサがありWYD参加者を地元の方々が温かく歓迎してくれました。そこで大きな驚きが。日本の教会よりステンドグラスがキレイなのに、は本当に凄いとしか言い様がありません。感動で物が言えずにいました。



ホームステイ先にて

三日目、



マリエンフィールドでの集い

万人以上もの人々がマリエンフィールドを目指して歩いてくる姿は、驚きでもあり勇気を与

### 転 本大会に参加して

四日目、五日目とルクセンブルク国内を巡りたくさんの事を体験させて頂くことが出来ました。ビール工場でビールが出来るまでの過程を説明してもらったり、第二次世界大戦での歴史を知ったり、市内を観光したり、多くのきれいな景色と優しいルクセンブルクの人達に出会えて本当に嬉しかったです。書きたい事がたくさんありましたが、文章能力に欠けているのでまとまりませんでした。大変申し訳ありませんがとても簡単にまとめてしまった事をお詫びします。

普通寺教会 林 莉華

八月二〇日WYDに参加しているすべての人がマリエンフィールドを目指して徒歩巡礼を行いました。今回のテーマ「わたしたちは、イエスを拝みにきたのです。」(マタイ二・二)を胸に、各人がイエス様と出会う旅の始まりです。一〇〇

えられるものでもありません。

私自身WYD以外でこれほど多くの国々の若者が集まり、食事をし、共に野宿をする姿を目にした事はありません。集まりの中で国同士の争いもなく、皆が同じ物を食し、同じように寒さの中で野宿したのです。この野宿の寒さの中で、現在難民生活を強いられている人々の辛さをほんの少し感じる事も出来ました。そして、この会場内ですれ違う人々の中にいて人種の違いを感じながらも、心の中で「ここにいてすべての人は、神さまがお造りになったんだ。」と何だか納得し、神さまの前では兄弟であると強く感じました。WYDに参加した若者はそれぞれ何かを求め、そして何か重荷を抱えてケルンに来たのかもしれませんが。状態は一人一人違うけれども、その一つ一つをご存知なのはイエス様で、そしてイエス様がこの日一〇〇万人もの若者を招いて下さったのです。

教皇様はミサの終わりに「感謝の祭儀は続きます。キリストの喜びのうちに続けていってください」と若者を励まして下さいました。私達も、東方の三博士と同じように帰りは違う道を通ってマリエンフィールドを後にしました。その道のりは思ったより大変なものでした。私達の人生もこのように担う十字架を重く感じる時もあるでしょう。しかし、教皇様のお言葉のようにキリ

ストの喜びのうちに歩むなら、希望を抱いて一歩づつ進めると感じられるのです。

### 結 WYDを振り返って

新居浜教会 越智恵理子  
俵原暢佳

帰りの飛行機の中では、心地良い疲れにまどろみながら、大会中の出来事を振り返っていました。神様から頂いた皆さんの恵みを取りこぼさないように、胸に焼き付けるように思い出を今一度噛みしめていました。あふれん



ケルンにて溝部司教と

ばかりの人が同じ所を目指して歩んだこの旅路。外見も衣装も感性も氣質も文化も違う人々が、違いを抱えたまま、違いを乗り越えて、同じキリストに向かつて歩んだ数々のプログラムに、私はこの大会のシンボルマークで表されたこの形に思いを馳せました。このCは、全世界と教会を包み込むいくつしみ深い神のみ腕を表現しています。神様はふところが深く、ご自分の所に来るすべての人を決して拒んだり追い返

したりせず優しく包み込んで下さいます。目標は同じでもそこに至るためのやり方は色々あつて、それぞれの文化や感性にあつた仕方です。神様に近付いていいんだと感じました。そして、言語の違う人々と挨拶を交わしほほえみ合いながら同じ目標を目指したこの体験に、国籍を超えたカトリック教会のパワーと偉大さに酔いしれていました。松浦司教様のカテケージスで、ある重要なことに気付かされました。私たちの目的は、教会が発展することにあるのではなく、教会が世界の平和と一致の道具となることにあるのだという言葉を聞いて、自分の視野がカトリックこそ最高だという排他的な内向きのものに向かつていたことに気が付いたのです。この松浦司教様のカテケージスと高松教区のカテケージスは非常に評判でした。多くの青年達の人生や召命を導いたものと思います。

最後に、本大会中にテゼの創始者口ジェが帰天されましたが、テゼの音楽が大会中の日々の典礼の中で美しい黙想の時を与えてくれました。フルートの音色に耳を澄ませたり、口ずさんだりするとき心が癒されました。典礼や黙想に美を織り交ぜてくださったブラザー・ロジェに感謝し、ご冥福をお祈りしたいと思えます。

徳島教会 松田栄作

# 今治教会に派遣されて

今治教会 村上康助神父



高松教区にきて四ヶ月がたちました。

これまで家庭に恵まれぬ子供たちの施設と学校で、ずっと働いてきました。四年ほど前から大分県中津市に子供たちの「癒しの家」をつくる仕事をしていましたが、ご縁があつて今治に来ました。四

キリスト教とは全く縁のない家庭に、わたしは育ちましたが、聖書的に言えば「母の胎内にいたときから」、わたしを選び分けてくださった神の導きで司祭になりました。

わたしはサレジオ会の司祭です。でもサレジオ会の靈性やドン・ボスコについて語るためではなく、わたしを遣わされた主キリストの言葉を語るために来たのです。

わたしは教皇・司教・司祭・信徒・修道者であるより先に、キリストにおいて兄弟姉妹である、これを何よりも大事にしています。皆様とご一緒

に、神の言葉を聴き、一つのパンを分け合い、兄弟の交わりに生きる、これが私の使命だと思っています。

# 江の口教会 中島町教会に派遣されて

江の口教会・中島町教会 諏訪栄治郎神父



大阪教区司祭の諏訪栄治郎です。

この七月に溝部司教様の要請を受けて、高知地区の江の口教会と中島町教会

の宣教司牧を、オペレート会の神父様方と共に協力して担当することになり、大阪教区から派遣されました。叙階を受けていつも神さまの適切なご計画に感謝しながら二八年が経ちました。

この一〇年は神戸にあって阪神淡路大震災の中から教会の再出発を迫られ、悲しみの中にも神の国を見いだす出会いと恵みをたくさん頂きました。

一区切りとして、四国八十八力所の

お遍路を考えていた矢先、この派遣となりました。団塊の世代でいつの間にか、考え方、生活パターンが定着しつつある中で、柔軟にそしていつも福音的に自由でありたいと願っています。

この地において神さまの備えてくださるよき業を共に分かち合いたいと思っています。趣味はアウトドア系で海山川が大好きなので、四国は二重丸なのです。よろしくお願いいたします。

# 平和旬間に寄せて

## 二〇〇五年広島教区平和行事に参加して

日本人でありながら、私は一度も広島に行ったことがなく、いつか必ず行きたいものだと考えておりました。今回はじめて、教会学校のみなさんとともに、娘ふたりも連れて、八月五日に広島を訪れました。

来館者で混みあう平和記念資料館を見学した後、午後六時から公園内での祈りの集いに参加。その後、市内の繁華街を、全国各地から集まった大勢の信者さんたちと共に行進いたしました。ほんとうに大人数の行進で、前を行く

番町教会の子供たちの姿も見えないほど。その時「全ての人の平和を願い...」という歌を覚えてもらいました。単純なメロディーのくり返しの歌ですが、心にしみ込むような美しく優しい祈りの歌で、涙がこぼれそつになりました。

七時半から幟町教会で平和祈願ミサが行われました。ローマ教皇庁や釜山教会、フィリピンの教会からも司教様たちが数名ずつ来られており、長崎と大阪の司教様、全国各地の司教様に神父様たちが次々と入場。娘たちはびつくり仰天でしたが、松永神父様を見つけると、安心して妙にうれしがっていました。朗読やお話も、韓国語あり英語ありで、まさしく世界平和の御ミサなのだ、という感じがしました。

六日は午前八時より追悼ミサが行われました。八時一五分の鐘の音で黙禱。最近亡くなられたという被爆者の方の詩が朗読され、心打たれました。

戦争をまったく知らない世代の私と娘たちが、六〇周年という節目のたいせつな時に、たいせつな場所で、平和の祈りを捧げることができました。この行事に参加する事ができて、本当によかったですと思っています。

番町教会 生越葉子

# 各地区だより

## 素晴らしい手話ミサ

松山教会では六月二六日(日)の一時ミサで、一昨年に続いて二度目の手話ミサが捧げられました。この日は、広島教区の「主和の輪」会員一名と桜町教会から二名の方が来てくださり、岡山教会のミッシェル神父様が手話をしながらミサを挙げてくださいました。歌や祈り全体にも手話通訳がつきました。聖福音はルカ一五章から「見失った羊」のたとえ話を選ばれ、祭壇に向かう九九匹の群れを数えた後、迷子の一匹を探しました。



手話ミサでのひとこま

聴覚障害者のために視覚に訴えた表示や、和やかな雰囲気の中に核心を逃がさない工夫がちりばめられていて、素晴らしいミサでした。

教会学校の  
の子供達も  
たった二度  
の練習でし  
たが、心を  
こめて「主  
の祈り」が  
出来ました  
これから

も毎年手話ミサが行われ、手話ミサがないときも「主の祈り」とか「聖母マリアへの祈り」「使徒信条」など、手話つきで祈れたらと夢を膨らませています。

高松教区でも教区行事の折には、手話通訳がつくほどに充実するときがあることを願っています。

松山教会福祉社会渉外委員長  
中川深恵子

## 三本松ルルド祭 一〇周年をむかえて

三一年前、ドミニコ会神の母マリア修道院のシスター方と一緒に小さなルルドをつくりました。その後、特別聖年の長崎五島巡礼で訪れた諸教会のルルドに触発され、年に何度かここに集う子供たちのために少し手直しを始めました。基礎を生かしての小さな手直しのつもりがだんだん大きくなり今の

かたちになりました。お披露目日が決められ、最後は突貫、皆で夜遅くまで東の空が白むこともありました。以来、二一回。今年は五月八日(主の昇天)に近隣・県内外の多くの方たちと二〇周年を祝いました。ロザリオの祈り、溝部司教様司式祭壇一二人によるミサ、恒例のうどん交流タイム。ミサの終わりに教区会計の濱口秀昭神父様、



ルルド祭20周年にて

福岡と中津から来て下さった山頭原太郎・松永国治両神父様の紹介がありました。

教区の一  
致をめざし

ておられる司教様は、お説教の中で、昔のキリシタン時代の信徒が、どのようにお互いに信仰を支え深め合い、その後訪れた迫害の時代をいかに生き抜いたかを言及され、今、私たちがこの先達の信仰をどうとらえ、歩むかを、問いかけられました。

今年は桜町教会の子供達の参加がたくさんありました。熱心に祈る子供たちの姿に、かつて小中学生召命キャンプに参加し、海から集めた小石に祈りを押し、ロザリオを形どりながら一生懸命に埋め込んだ当時の子供たちの姿が重なり、育て、引き継がれる信仰の大切さを感じました。

教会入り口のブロック塀に本場ルルドの出来事をパネルにして掲示してあります。今年も、聖母月の午後のひとときに集まった二百余名が心をひとつにして祈り、思い思いに歓談しながら過ごしました。

たくさんの方の参加と、惜しみなく

手助けをして下さった各小教区の方々  
の善意に、三本松教会の一同、喜びの  
うちに感謝しています。

「恵まれた者、喜びなさい。主はあなたとともにおられます。」(ルカ一・二八)

三本松教会 六車廣行

この記事は、広報紙(一〇七号)の記事として投稿されたものですが、諸事情により前回広報紙に登載できなかったものです。六車様はじめこのルルドのお祭りに関わった信者の皆様及びお祭りに参加された多くの信者の皆様に深くお詫ひいたします。

## 泣く人の幸いさいわ

人間年を取ると涙もろくなる。嬉しいといつては泣き、悲しいといつては泣く。情にもろく涙にもろくなる。

そんな日常生活の中で、私は「泣く幸せ」を考える。そして、思い出すのがずっと昔、尻枝正行神父様が書かれたローマからの便り「パチカンの小窓より」。

「泣く」という字はサンズイに「立つ」と書く。涙で溺れそうになつた人をその淵から抱き上げて、しっかりと立たせて「くださる神さまの手をそこに

見る。「涙」という字はサンズイに「戻る」と書く。悲しみに押し流されて自分を見失い、そんな人をその渦から救出して、本来の自分にひき「戻して」くださる神さまの心を指す。ここにキリストの「泣く人の幸い」がある。問題は泣くか泣かないかではなく、神さまの手の中で泣けるかどうかということだ。

たしかこのような文章だったと思つて、そして私は思う。神さまの手の中で泣ける人は幸せ。私もそんな人でありたい。(尻枝神父様はバチカンの諸宗教対話理事局に務めておられたサレジオ会の司祭です。)

徳島教会 友成ヤエ

### 青濤(あおなみ)の家

青濤の家(女性の為の緊急避難の家)は一九八九年に、シモンズ師によって誕生しました。

徹底的に人権を重んずるために、内容その他すべてを一般社会に公開することはありませんが、一六年を経た今、報告できますことは、先ずなによりもいつの時にも神様の絶妙な御はからいがありましたこと、又、シモンズ師のもとで昼夜をわかつたよるこび共働してきたボランティアの姉妹達の存在と、惜しみなく愛を続けて下さった数多く



筆者武田さん

言葉を送ります。私たちがこの一六年間に大事な家族として迎え入れた姉妹達には、国内各地はもとより在留外国人として南米、東南、中東アジア、ヨーロッパ、アフリカ等一ヶ国のそれぞれの年代と母子達が含まれています。又、ボランティアとしてベルギー、フランス、中国からも短期間ではありましたが生活を通して「出あい」「分かちあい」「生きる」を体験しよろこびと感謝を共にしました。

日本一小さな町で「青濤の家」は、今日も神のいぶきを豊かに受けて、新たな人生の構築にむかつて、みんなが明るく元気に生きつづけています。

「神に感謝」

赤岡教会 武田 紀



の支援者のかたがたのおかげさまで、こんにちの「青濤の家」があるというこトです。心を込めて感謝の祈りと

## 司教日程

- 10月1日~2日(土・日) 大学生のつどい(池田教会)
- 10月6日(木) 常任司教委員会(東京)
- 10月7日~10日(金~月) 長崎訪問
- 10月11日(火) 司祭評議会
- 10月14日~15日(金・土) 東北カトリック教員研修会(仙台)
- 10月23日(日) 殉教者列福歴史部会(大分)
- 10月30日(日) 宇和島教会
- 11月1日~3日(火~木) 東北キリシタン巡礼(二本松殉教祭)
- 11月5日(土) 松徳学園落成式(松江)
- 11月6日(日) 長崎研修会
- 11月8日(火) 司祭評議会
- 11月10日(木) 常任司教委員会(東京)
- 11月13日(日) 伊予三島教会
- 11月15日~17日(火~木) 日韓司教交流会(那覇)
- 11月20日(日) 下田師金祝(福岡)

- 11月23日~25日(水~金) フォコラーレ司教の集い
- 11月26日~27日(土・日) 信徒協総会
- 12月1日(木) 常任司教委員会(東京)
- 12月3日~4日(土・日) 桜町教会黙想会
- 12月6日(火) 司祭評議会
- 12月10日~11日(土・日) 松山教会黙想会
- 12月13日~14日(火・水) 司教勉強会(東京)
- 12月24日~25日(土・日) カテドラル・ミサ



# 各県コナオ

香川県の巻



## 息子のケルン行き

思ってもみなかった息子のケルン行きが実現し、神さまのお恵みに深く感謝いたします。

ことの発端は、今年の二月、番町教会で行われた黙想会での溝部司教様の講話でした。司教様の青少年への情熱にあふれたお話は、私の心にポツと火をつけました。

若い時のチマツチ神父様との出会い、神父様から脈々と受け継がれているサレジオ会の教育理念、それは子供たちと同じ目の高さで共に歩むということ。是非、息子に司教様に会わせたい！ケルンに行つてたくさんの若者と出会つてほしい！そして、神様の大きな愛を感じてほしい！等の思いが飛び出し、行動として走り始めたのです。

小学校低学年以来、教会学校に行つていかなかった大学生の息子が「いつてもいいよ」と答えたのも不思議な話でした。御聖霊の働き

のなかで、溝部司教様、松永神父様、ジュード神父様、祈りの友達の協力によって、ケルンに出立するという願いが実現しました。感謝いたします。

司教様の紋章でもある、御聖霊の一致のなかで、ケルンから帰国した全ての若者が、頂いたお恵みを生かせることができますように祈りつつ。

番町教会 田本真喜子

## 坂出教会恒例の春の遠足

六月二六日、坂出教会の行事の一つ、春の遠足に香南町の神の母マリア修道院を訪れました。神父様を含め一七名がこの遠足に参加し、院長様のお計らいもありシスター方とも楽しい一時を過ごすことができました。

修道院に着くとシスターの笑顔で迎えられ、ひと休みした後、昼の祈りを共に捧げました。八角形の聖堂は木の温もりが感じられ、窓の外から



修道院のルルドの前で

らは鳥の声も聞こえる温まる落ち着いた気持ちになりました

昼食後には院長様が談話の場を設けて下さり、自己紹介や修道院での生活や仕事のこと等を伺ったりと和やかな時を過ごしました。

裏庭にあるルルドのマリア様の前で聖歌を歌い、神父様からの祝福を受け修道院を後にしました。

最後に、この訪問を快く歓迎して下さいました修道院の皆様にご心より感謝します。

坂出教会 富田倫子

## 下田神父様金祝

七月三日に桜町教会創設五〇周年と下田武雄神父様金祝を祝う記念大会を開催しました。当日は近隣の教会や修道院からもご参列をいただき四百人近い参加者でお祝いをすることができました。ありがとうございました。

下田神父様は一九五五年に司祭叙階されました。そして一九六五年に桜町教会助任司祭に任命された後、一九七〇年から二〇〇一年まで主任司祭として長い間私たちを指導してください。また桜町聖母幼稚園の園長としても活躍されました。その長い司牧生活を労うとともに感謝の気持ちを含めて、みんなで張り切ってお祝いすることにしていたのですが、残念なことに、神父様は記念大会前日肋骨を傷められ、欠席されました。



神学院にて

翌週 お住まいの国の国際宣教院にお見舞い、伺い、記念式

典を盛り上げた国際部のコーラスや聖母幼稚園園児のコーラスを録画したビデオと信徒からのお祝いを届けました。神父様は本当に怪我をされたのかなと思つくらいお元氣そうで大変喜んでくださり、「まだ少し痛むがもう大丈夫、欠席してごめんなさい、どうもありがとうございますにお伝えください」と仰つておられました。

下田神父様、これからもお元氣で、機会があれば日曜日の桜町教会のミサにもお越しください。

桜町教会 長谷川聖

<http://www.sakuramachi.catholic.ne.jp/>

## 俳句 春夏秋冬

復活祭 納骨堂へ アレルーヤ  
瀬戸内の 鳥ひいふーみ 玉桜  
まだ音の 出るオルガンや 夏蛙  
秋茄子や もぎたて並ぶ 道の駅  
陶工の 練る指赤き 毛糸帽  
桜町教会 澤田明子

## ごあんない

### 溝部司教様説教集「聖霊の息吹を受けて」発行



司教様が教区内外で話された説教・講話を収録した説教集「聖霊の息吹を受けて」がサンパウロ社から出版されました。  
お近くの教会書院でお求め下さい。

カトリック高松教区広報委員会 編

B6判237ページ

1000円(税込み)

お問い合わせ 087-831-6659

(教区広報委員会)

### 松山教会マリア書院の営業についてご案内

当書院は7月から信徒有志の奉仕活動(ボランティア)で営業することになりました。営業日と時間が下記の通り一部変更となりますので、お知らせ致します。

不慣れなことが多く、ご不便をおかけすることがあるかと存じますが、何卒ご利用下さいますようお願い致します。

#### 営業日と時間

火・木・土曜日

12:30～17:00(土曜日は当分の間、第1週と第3週のみ、開店)

日曜日

9:30～15:00(但し、10:00～11:00のミサ中は、閉店)

皆様のご要望にお応えできるよう品揃えに努め、ご来店をお待ちしております。なお上記の曜日・時間以外に遠方からお越しの方、または急用の場合、教会受付係がいる時は対応に努めますので、ご遠慮なくお申し付け下さい。

当面は15人の信徒が交代で販売に従事し、教会窓口ばかりでなく、出張販売などを通じて福音宣教活動に励みます。



#### 編集後記

七月末に桜町教会のメンバーを中心に行っている日本二六聖人巡礼ウォークに参加した。京都から長崎まで聖人が歩いた道を辿るものである。一〇数名のメンバーで二〇〇一年三月に京都を出発し、今回は二八回目で東広島市まで来ている。現在は旧山陽道を歩いているが、今回の行程には峠越えが含まれていた。旧山陽道といっても峠越えとなると、その道はどんどん狭くなり獣道に近い状態となる。藪こぎをしながらの峠越えだが、上りで道が二手に分かれた箇所に出くわした。近くに表示もなく、地図にも載っていない。どちらも道なりに判断のしようがなく立往生となった。仕方なく同行のS神父の「こちらの道がおう！」という声に従って進むが、何がおうのかよくわからないまま、不安や疑問が胸を覆って私の足取りはおぼつかない。幸いにもしばらく進むと傍らに「旧山陽道」という小さな標石が建っていて大いに安堵する。こうなると強い。どんなに道が狭くなろうが、藪に覆われようが、恐れることなく足取りはしっかりと歩いてどんどん進んで行く。この道は自分たちが歩いている道だという確信に支えられて無事里まで下りることができた。自分の歩んでいる道と位置を確認することの大事さを確認した次第である。

(多田 洋)